

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Invariant Participles in older and younger recensions of the first Novgorod chronicle

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2637">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2637</a>

# 『ノヴゴロド第一年代記』新旧写本における 不変化分詞について

岡本崇男

## 1 はじめに

この論文の目的は、『ノヴゴロド第一年代記』に見られる分詞構文における分詞とその分詞が表す動作を担う主体との文法的不一致について、成立時期の異なる「宗務院本」と「委員会本」を比較することによって、書き手の規範意識の時間的な推移を見ることにある。この年代記を選んだ理由は、以下の事情による。

『ノヴゴロド第一年代記』(Новгородская первая летопись) というのはキエフ・ルーシ時代にキエフと並んでルーシの経済・文化の重要な拠点であったノヴゴロドおよびその周辺地域の出来事を中心に書き綴られた歴史記録である。この年代記の写本群は「古輯」と「新輯」の二つに分類される。

「古輯」を代表する写本で現存するものは一つしかない。それは「宗務院本」と呼ばれ、13世紀から14世紀中頃にかけて筆写されたと考えられている [1, 4-5]。これは現存する東スラヴ年代記写本の中で最古の部類に入る。それ以外の写本群は成立時期が新しいために「新輯」と総称される。「新輯」を代表する写本である「委員会本」([1]の「新輯」の底本)は15世紀前半から中頃にかけて筆写されたと考えられている [1, 7-8]。したがって、二つの写本の間には成立期間に関して100年以上の開きがあるということになる。

二つの写本間には6525年(1017年)から6841年(1333年)までの記事内容に共通性が見られる。<sup>1</sup>そして、二つの写本の共通部分を読み比べてみると、「古輯」の内容が「新輯」にほぼ忠実に受け継がれているように思えるのだが、単語の表記や文法形態については多少の違いが見られる。従って、この両写本間の表記の違いを規範意識の時間的な変化だと見なすことが可能であ

<sup>1</sup> ただし、宗務院本には6524年から6860年までの出来事が記録されているのだが、委員会本と比較すると6524年の記事の大部分が失われており、また6841年のあとはかなり筆跡の違う6845年、6853年、6860年の記事があるに過ぎない。

るかもしれない。

## 2 検討の対象

### 2.1 「不変化分詞」とは

分詞（「形動詞」）は動詞の派生形の一つで、動詞が持つ文法的機能のうち補語や状況語等の文の二次的成分との関係を保持し、さらに当該の分詞が表す動作の主体あるいは動作の受け手に文法的一致を示す形式である。分詞は名詞の限定語になる以外に（1）二次的述語、（2）絶対与格、（3）第二斜格補語という三種類の分詞構文を作る。いずれの構文においても原則として分詞は短語尾形である。ところが、これらの構文において本来あるべき文法的一致、つまり性・数・格の一致が失われた能動分詞短語尾形が見られることがある。本論文ではこのような分詞を検討の対象とし、これ以降「不変化分詞」と呼ぶ。

### 2.2 今までにわかっていること

東スラヴ年代記の記述言語である東スラヴ文語の分詞短語尾形の形態については文献 [4, 303–363] で詳細に記述されている。そして、そのうちのかなりの部分（306–351 頁）が不変化分詞の説明に充てられている。同書において不変化分詞の形態分析のために利用された文献資料は相当数の教会文献、年代記、事務文書であり、これらを「古ルーシ語期」（11–14 世紀）の文献と近世ロシア語期（15–17 世紀）の文献に分けて考察が行われている。このことから、分析結果は十分信頼に値するものであり、東スラヴ文語<sup>2</sup>の不変化分詞にまつわる常識が提示されていると考えて差し支えない。<sup>3</sup>

文献 [4] で行われた不変化分詞の形態分析によって明らかになったことのうち、主なものをまとめておく。

<sup>2</sup> 「東スラヴ年代記」、「東スラヴ文語」というのは一般的な呼称ではない。日本では前者は「(中世)ロシア年代記」、後者は「古代ロシア語」と呼ばれてきた。しかし、「ロシア」という呼称はイワン雷帝の時代になって初めて使われたものであり、早くてもモスクワ大公国が興隆する 15 世紀以前の言語に関しては「古ルーシ語」と呼び、15 世紀以降の、特にトヴェーリ公国やノヴゴロド公国を併合した 15 世紀後半以降のモスクワ大公国の言語は近世ロシア語と呼んで差し支えないと思われる。年代記についても東スラヴ地域の各地で 17 世紀末まで作成されているため、「ロシア年代記」よりも「東スラヴ年代記」と呼んだ方が適切であると思われる。

<sup>3</sup> なお、文献 [4] の参考文献リストには、分詞短語尾形の歴史を扱った研究や特定の年代記テキストにおける分詞の形態と統語に関する研究も二、三挙げられており、特に И.Б. Кузьмина の研究は本研究の参考になる可能性が高いのだが、残念ながら現時点ではそれらを入手閲覧することができない。ただし、Кузьмина の研究成果は文献 [4] において何度か引用されているので、間接的にはあるが本研究でも利用できていると考えて差し支えない。

まず、古ルーシ語期については以下のとおりである。

- 不変化分詞には **-я/-а** で終わるもの (**неса/неся, слуша́я, ви́дя** のタイプ)、**-е** で終わるもの (**несяще, несъше, слушаще, слуша́вшие** のタイプ)、**-и** で終わるもの (**несящи, несъши, слушащи, слуша́вши** のタイプ) がある (306 頁など)。
- 不変化分詞と動作主体との結合は「文法的位置」(грамматическая позиция причастий) によって保証されている (305 頁)
- 不変化分詞と動作主体との結合パターン (308 頁) :

不変化分詞	動作主体 (名詞または代名詞)
(1) <b>-я/-а</b> で終わる	複数・双数 / 単数女性
(2) <b>-е</b> または <b>-и</b> で終わる	男性単数

- 不変化分詞は教会文献よりも年代記の方が現れる頻度が高い (322 頁)
- **-и** で終わる分詞には以下の傾向が見られる (328 頁)
  - (1) **-и** で終わる分詞は時が経つと共に増加する
  - (2) **-и** で終わる分詞は南西ルーシの文献で優勢である
  - (3) **-и** で終わる分詞は民衆語・口語が反映された文献でよく使われる
- 古ルーシ語期には不変化分詞と変化語尾を持つ分詞との対立が明確ではない (328 頁)

次に近世ロシア語期については、以下ようになる。

- 不変化分詞と変化語尾を持つ分詞が区別されるようになる (328–329 頁)
- 動作主体が単数か複数かにかかわらず、分詞主格形は単数形式である方が圧倒的に多い (335 頁)

つまり、不変化分詞というのは、形式上は能動分詞短語尾形の男性・中性単数主格形 (**-я/-а** で終わるタイプ)、男性複数主格形 (**-е** で終わるタイプ)、または男性複数主格形の別形 (**-и** で終わるタイプ) なのだが、動作主体を表す名詞ないし代名詞と文法的な一致を示さないもののことをいう。そして時代が下るにつれて、**-и** で終わるタイプと **-я** で終わるタイプの使用頻度が高くなるのがわかっている。

### 2.3 底本について

底本として使用したのは文献 [1] に収録されている「宗務院本」と「委員会本」の校訂本である。「宗務院本」（古輯）は文献 [4] における不変化分詞の調査対象となった古ルーシ語期の写本群に含まれているのだが、「委員会本」（新輯）はなぜか近世ロシア語期の写本群に含まれていない。その理由はよくわからない。本稿の冒頭部（「1 はじめに」）で述べたように、これら二つの写本の間には内容の共通性があり、古輯の内容がほぼ忠実に新輯に書き継がれているのだが、単語の表記や文法形態について多少の違いが見られるので、<sup>4</sup> むしろ両写本における不変化詞の使用状況を比較することで古ルーシ語期と近世ロシア語期の規範意識の違いを探ることができると思われる。

### 2.4 表記について

実例は“*ождая* (132)”のように、語形の後にそれが見つかった箇所を括弧に入れて示す。括弧内の数字は写本のページ数で 132 であれば「第 132 葉表（おもて）」、数字の後に *v* が付いていれば（例えば 132*v*）「第 132 葉裏」ということを意味している。どちらの写本で見つかった語形であるのかを明確にするために、必要に応じて [宗]（＝宗務院本、すなわち古輯）、[委]（＝委員会本、すなわち新輯）という標識を付加することがある。また、例文は宗務院本と委員会本の双方から対応する箇所を抜き出して、文の冒頭に上記の標識を置き、最後に日本語訳を付ける。宗務院本のテキストが比較の基準になるので、宗務院本の訳を基本とするが、写本間で日本語訳に顕著な違いが出る場合に限り、角括弧の中に写本の標識を示して、その後その写本固有のテキストの訳文を続ける。日本語訳は [6] にもとづいているが、不適切だと思われる部分は著者が独断で修正した。

## 3 「宗務院本」と「委員会本」における不変化分詞

本節では『ノヴゴロド第一年代記』の新旧写本における不変化分詞の使われ方について構文別に、すなわち、二次的述語 (3.1)、絶対与格 (3.2)、第二斜格補語 (3.3) の順番で検討していく。

### 3.1 二次的述語構文

分詞短語尾形が文の述語（＝動詞の人称形）が表す動作を補足する動作を

<sup>4</sup> 例えば、論文 [7] で示されたように古輯で *Гюрги* と綴られている人名が新輯では *Юрьи* に書き換えられている。

表している時、その分詞は「二次的述語」の機能を果たしているという。その場合、分詞の動作の主体は文の主語となる。

「委員会本」には *съсылающихся* (192v), *накладъши* (164v), *раздравши* (149) のように語尾が *-и* で終わる不変化分詞が散見される。*-и* は本来、能動分詞短語尾の女性単数主格・与格・所格、男性単数所格、男性および中性の複数造格、中性および女性の双数主格・対格の語尾なのだが、「委員会本」の *-и* (*-щи/-чи, -ши*) で終わる能動分詞短語尾形は文脈から判断して男性複数主格の標識 *-е* の異形態のように見える。文献 [4] でも「*-и* で終わる分詞はもともと複数と関連している」と述べられていることから、この判断は間違っていないと思われる。性・数・格という名詞類の文法範疇の標識である曲用語尾（格語尾）について両写本を比較すると、これらの文法範疇に関する規範意識が時間の経過とともに衰退する兆候が見られない。それはおそらく東スラヴ語では口語のレベルでも曲用体系が保持されていたためだと推察される。ただし、音声は時間的な変化を被り易いので、その変化が表記の揺れという形で現れたのかもしれない。

この *-и* で終わる能動分詞短語尾形は、古ルーシ語期の代表的な文献の一つである「宗務院本」には存在しない。この *-и* が本来の男性主格語尾 *-е* と袂を分かって不変化詞形成要素になったのがいつの頃なのかはよくわからないのだが、もしかすると「委員会本」が編纂された時期にすでに状況語の意味に特化された能動分詞を形成する要素として書き手に認識されていたのかもしれない。つまり、語尾の文法的な一致から解放された汎用の不変化詞になりつつある形式だったとも考えられる。

以下にいくつか例を挙げておく。なお、例文中に現れた能動分詞は斜体で示し、不変化分詞だと思われるものは更にボールド体を使って強調表示する。

[例1] [宗] И *убоявшеся*, почаша ся возити на одну сторону къ святой Софѣи, рекуще: «положимъ главы своя у святой Софѣи» (137v)

[委] И *убоявъшиися*, почаша ся возити на одну страну къ свяѣи Софѣи, ркуще: «положимъ главы своя у святѣи Софѣи» (177)

〈そして（ノヴゴロドの）人々は（キリストの力を見て）恐れ、一方の側の聖ソフィアに向かって川を渡り始めた。彼らは『聖ソフィアのもとで命を捧げよう』と言った〉

[例2] [宗] но мы грѣшнии аки пси обращаемся на своя бльвотины, не *помышляюще* казни божия, яже на ны приходит за грѣхы наша (138)

[委] нь мы грѣшнии акы псы възвращаемся на своя блевотины, не

**помышляюци** казни божия, яже на ны приходит за грѣхы наша (177v)

〈しかし、わたしたちは犬のように罪深いために自分達が吐瀉したものに立ち戻り、自分達の罪のために自分達に降りかかる神の罰のことを考えないのである〉

[例3] [宗] И **пригонивше** подь городъ, и зажгоша посадъ весь; и много зла бысть: и погорѣша серкы и честныя иконы и книги и еуангелия; и много сель попустиша около Пльскова (127)

[委] и **пригонивши** под город, и зажгоша посадъ весь и много сель потратиша около Плескова (165)

〈そして彼ら(ネムツィ=ドイツ騎士団)は町(プスコフ)の近くまで迫り、市域全体に火をつけた。[[宗] たくさんの禍があり、教会や聖なるアイコンや聖典や福音書が焼けてしまった。] 彼らはプスコフ周辺の多くの村を荒廃させた〉

3例ともに「宗務院本」の男性複数主格形の能動分詞短語尾が「委員会本」では **-и** で終わるタイプの分詞に書き換えられている。これらの分詞の動作主は「ノヴゴロドの人々」[例1]、「わたしたち」[例2]、「ネムツィ(=ドイツ騎士団を意味する集合的複数)」[例3]であるので、**-и** で終わる分詞も文法的に男性複数主格に対応していることになる。

しかし、以下の[例4]においては「委員会本」の **-и** で終わる能動分詞が明らかに不変化詞となっている。なぜなら、「宗務院本」では動作主が男性単数 **Мьстиславъ** であり、両写本で使用される語彙に若干の違いがあるものの、分詞構文については同一条件であるため、「宗務院本」の現在分詞単数男性主格 **видя** と「委員会本」の **видящи** は同じ統語機能を果たしているということが出来る。この場合、[宗] **видя** は主語と文法的に一致しているので、[委] **видящи** は形態的に不変化分詞だということができる。

[例4] [宗] Мьстиславъ же, Кыевськый князь, **видя** се зло, не движесе съ мѣста никамо же (98v)

[委] Князь же Мьстиславъ Кыевськый, **видящи** таковое зло, не поступи ни камо с мѣста того (145)

〈キエフ公ムスチスラフはこの([委]のような)惨状を目の当たりにして、その場からどこへも動けなかった〉

不変化分詞は **-и** で終わるタイプだけではない。以下の[例5]のように「宗務院本」では能動分詞が文の主語 **Корела** (「コレラ」=カレリア人を意味す



る集合名詞) に意味的に対応して複数主格 *обидуче* となっているのだが、「委員会本」ではもともと過去分詞単数男性・中性主格形であった *обшед* が対応している。文の述語がアオリスト 3 人称複数形 *избиша* であり、もう一つの二次的述語 *выводяще* も男性複数主格形であることから、この場合 *обшед* は *выводяще* と同じ統語機能を果たしている不変化分詞だと見なすことができる。

[例5] [宗] *нъ тѣхъ Корѣла, кде обидуче, въ лѣсе ли, выводяче, избиша: бе бо ихъ пришло творяху 2000 или боле, богъ вѣсть, а то все мертво* (103v/104)

[委] *нъ паки и тѣхъ Корѣла, гдѣ любо обшед, или в лѣсѣ или на нѣвѣ или в вежах, и тѣх, выводяще, избиша: бѣ бо ихъ пришло творяху 2000 или болши, богъ вѣсть мало же ихъ въ свою землю убѣжа, ано вся кость ту паде* (148)

〈しかし、その者たちをコレラたちは歩き回って森の中であろうと [[委] 畑であろうと、漁撈場であろうと]、連れ出して殺した。その数は2000以上とも言われているが本当のことはわからない。[宗] 全ての者が死んだ/[委] 彼らのうち自分の土地に逃げ帰ったものはあまりおらず、全ての者がそこで斃れた〉

[4, 337] によれば、動詞 *ити* および、その接頭辞による派生形の過去分詞には *-шедъ* と *-шедши* があるのだが、15–17 世紀の文献資料では *ся* を伴う動詞を除外すると、それぞれのタイプの分詞の出現比率が 12:1 であるという。また、「委員会本」の中で語根 *-шед* で終わる 16 の過去分詞の動作主体のうち 13 は単数で表されている一人の人物で、[例 5] のように主語が集合名詞である例は他に 1 つしかない。唯一、複数名詞の主語の二次的述語となっているのは以下の 1 例のみなのだが、これと同内容の記事が「宗務院本」にはない。

[例6] [宗] なし

[委] *Новгородци сташа, не дошед Дмитрова 5-ю верьсть, и стояша 5 днии близъ себе съсылающесе послы* (187v)

〈ノヴゴロドの人々はドミトロフまで 5 ヴェルスタのところで止まり、5 日の間互いに使者を送り合っていた〉

従って、*обшед*, *дошед*, *пришед* などの過去分詞は「委員会本」の書き手の規範意識の中では、どちらかというともまだ単数男性・中性形であったのかも



しれない。これに対して、*шедши, вшедши, пришедши, пошедши, нашедши* のように *-ши* で終わる分詞の動作主体には単数と複数の両方があるので、やはり約 2 世紀の間に *-ши* のタイプの分詞の不変化詞化が進行したと考える良さそうである。

### 3.2 絶対与格構文

「絶対与格構文」は分詞の二次的述語の構文と違い、文の述語の動作主（つまり主語）と分詞が表す動作の担い手とが同じでないことを原則とする。そして、分詞と分詞の動作主体はともに与格となる。絶対与格構文は二次的述語の構文に比べると出現頻度の点で劣るのだが、決して少ないというわけではない。そして、この構文に関しても両写本間には基本的な継承関係が見られる。例えば、以下の [例 7] のように原則として同じ文構成となっていることが珍しくない。

[例7] (宗) *тъгда помързъшию озърю и стоявию 3 дни, и въздре угъ вѣтръ, изламавъ, вѣнесе все в Вълхово...* (106v)

(委) *тогда же померзъшию озеру и стоявию 3 дни, и въздра угъ вѣтръ, и изломавши, внесе все въ Волхово...* (150)

〈その時、湖が凍って三日間凍ったままだったのだが、南風が吹き起こって、(氷を) 壊し、全てをヴォルホフ川に流し込んだ〉

上の例の文の主語は主格名詞 *вѣтръ* 「風」で述語はアオリスト 3 人称単数 *вѣнесе* 「運び込んだ」であり、過去分詞 *изламавъ* ([宗] 男性単数主格) / *изломавши* ([委] 不変化詞) は二次的述語の機能を果たしている。これに対して、与格形の名詞 *озърю/озеру* 「湖」と与格形の分詞 *помързъшию/померзъшию* 「凍った」と *стоявию* 「留まっていた」は主述関係にあり、これらを中心とした絶対構文を形成している。ただし、[例 7] では与格分詞はそのまま「委員会本」に引き継がれているのだが、二次的述語の機能を持つ分詞が「委員会本」では不変化詞化している。しかし、絶対与格構文を構成する分詞にも以下の例のように不変化分詞が使用されることがある。

[例8] (宗) *и съдѣвъшию ему от въръбнице до Сменова дни 6 мѣсяць одну, и выгнаша из Новагорода, и послаша опять по Ярослава. Иде Ярославъ съ Новаго търгу Володимирю, позванъ Всеволодомъ* (58v)

(委) *и съдѣвшии ему одну 6 мѣсяць, и выгнаша его из Новагорода, и послаша опять по Ярослава с Новаго торгу в Володимирь, позвани*

## Всеволодомъ (123)

〈彼(ヤロプリク公)が柳の主日からスメンの日まで6ヶ月間一人で(ノヴゴロド公として)座した後、(人々は)[[委] 彼を]ノヴゴロドから追出し、再びヤロスラフを迎えに[[委] フセヴォロドに呼ばれてノヴィ・トルグからヴォロヂミリに]使者を送った。ヤロスラフはフセヴォロドに呼ばれ、ノヴィ・トルグからヴォロヂミリに行った[[委] ではこの文が前の文と融合している]〉

なお、絶対与格構文に関して「宗務院本」の与格分詞が「委員会本」で不変化詞に書き換えられている例はこれだけで、その他については絶対与格構文が通常の文に書き換えられた1例を除いて全てそのまま継承されている。

絶対与格構文は文献時代初期においてもおそらく文語特有の、つまり書き手の話し言葉とはかなり異質の表現手段であったらしく、古ルーシ語期の文献である「宗務院本」にも誤用が見られる。ところが、以下の二つの例では、「宗務院本」の不変化詞的な分詞に対応する「委員会本」の分詞が正しい格形式を持っている。

[例9] [宗] Тоже бы *намъ* все *видяще* предъ очима, лучышимъ быти, мы же быхомъ пущци: брат брату не съжальшеться, ни отецъ сынови, ни мати дъчерь, ни сусѣдъ сусѣду не уламляше хлѣба (114)

[委] Тоже *намъ* все *видящим* предъ нашими очима, нь видящи се како бы намъ лучыши быти, мы же пуци быхом: брат брату не съжальшеться, нь отецъ сынови, ни мати дщери, ни сусѣдъ сусѣду не уломляшеть хлѣба (154v)

〈わたしたちはすべてのことを目の前に見て、より良い者になる筈であったのに[[委] 良い者になるためにこれを見たのであったのに]、わたしたちはもっと悪い者になってしまった。兄弟が兄弟を思いやらず、父が息子を、母が娘を、隣人が隣人にパンを分け与えることをしなかった〉

[例10] [宗] избивъше стороже дверьныя, придоша къ сѣньмъ, князю же *очютивъше*, попадъ меч и ста у дверии, боряся с ними, оныхъ же бяше много, а князь одинъ (39)

[委] избивъше сторожеви дворныя и приидоша к сѣнемъ, князю же *очютившию*, попадъ меч, ста у двери, боряся с ними, оныхъ же бяше много, а князь одинъ (114)

〈彼ら(アンドレイ公の寵臣たち)は門衛たちを殺し、広間にやってきた。〉

一方、公は気がついて剣を搦んで扉のところに立ち、彼らと戦った。しかし、彼らは大勢であり、公は一人であった)

[例9] の「宗務院本」の現在分詞 *видяще* は人称代名詞複数与格 *намь* と絶対与格構文を形成しているのだが、分詞が男性複数主格形になっている。

[例10] の過去分詞 *очютивъше* もやはり男性複数主格形で、その動作主体は単数与格の男性名詞 *князю* である。ところが「委員会本」ではこれらの不変化分詞がそれぞれ *видящим* (複数与格)、*очютившю* (男性単数与格) というように正しい形式になっている。

なお、両写本共に同じ動詞から派生した与格分詞が使われてはいるのだが、分詞の語幹形式が違っている例が一つある。

[例11] [宗] Того же лѣта придоша изъ заморія Свеи в силѣ велицѣ в Неву, ... , поставиша городъ надѣ Невною, на усть Охты рѣкы, ... , и посадивше в немъ мужи нарочитыи с воеводою Стѣнемъ и отъидоша; *князю великому* тогда не *будуцю* в Новѣгородѣ. (152v/153)

[委] Того же лѣта придоша изъ заморья Свѣя в силѣ в Неву, ... , и поставиша город надѣ Невною на усть Охты рѣкы, ... , и посадивше в немъ мужи нарочитыи с воеводою Стѣнемъ, и отъидоша; *князю великому Андрѣю* не *бывшю* тогда в Новѣградѣ. (191v)

(同じ年、海の向こうからスヴェイが大軍でネヴァ川にやって来た。(…) 彼らはオフト川がネヴァ川に注ぎ込むところを見下ろす場所に砦を築いた。(…) 彼らは砦に主だった者たちを軍司令官スチェンとともに残して去っていった。この時、ノヴゴロドには [[委] アンドレイ] 大公がいなかった)

ほぼ「丸写し」のテキストであるのだが「宗務院本」の *будуцю* が「委員会本」では *бывшю* となっている。現代ロシア語では *будущий* 「将来の」と *бывший* 「かつての」は現在を基準にすると正反対の意味を表すのだが、「宗務院本」の *будуцю* が過去分詞の意味を持っていることは文脈から容易に判断することができる。一般に完了アスペクトの語幹から作られる現在分詞は接辞要素の種類に関わらず過去分詞となるので、動詞 *быти* の「未来形」*буду* (*будеши*...) が完了アスペクトの動詞だとすると [2, 351]、これから派生する分詞はやはり過去分詞だということになる。つまり、*бывший* の別形だと考えて差し支えない。

以上のことから、絶対与格構文は文語を特徴付ける代表的な統語手段とし

て近世ロシア語期になっても守られ続け、むしろ時代が降ってから、不変化分詞の増加に象徴される形態規範の乱れを補うかのように、書き手の規範意識の中に強く意識されるようになったのかもしれない。

ただし、「委員会本」の書き手が〔例9〕、〔例10〕に見られる「宗務院本」の不変化分詞を修正せずにそのまま使用している以下のような例もある。

〔例12〕〔宗〕 Бывшу бо великому тому снятию и добрымъ мужемъ главами своими *покаяюще* за святую Софью, милосердныи господь посла милость свою въскорѣ, не хотя смерти грѣшнику до конца, кажа нас и пакы милуя, отврати ярость свою от нас, и призрѣ милосерднымъ си окомъ (145v/146)

〔委〕 Бывшу бо великому тому снятию и добрымъ мужемъ главами своими *покаяюще* за святую Софью, господь милосердныи съсла милость свою въскорѣ, не хотя смерти грѣшнику до конца, кажа насъ и пакы милуя, отврати ярость свою от нас, и призри милосерднымъ окомъ (182)

〈この大会戦があった時に、そして善良な人士らが聖ソフィアのために自分たちの命を投げ出している時に、慈悲深い主はご自分の慈悲をすぐに送られた。罪人の死を最後までは望んでおられなかったからである。わたしたちを諭され、再び慈悲をかけられて、ご自分の怒りをわたしたちから逸らされ、〔〔宗〕 ご自分の〕慈悲深い目で見つめられた〉

この例の *покаяюще* は本来であれば“*добрымъ мужемъ*”（複数与格）に一致させて *покаяющимъ* となって絶対構文が作られるべきなのだが、「委員会本」の書き手も修正していない。

### 3.3 第二斜格補語

第二斜格補語というのは動詞の補語と文法的な一致を示して、動詞の補語の内容を説明する名詞、形容詞、あるいは分詞のことをいう。多くの場合、これらの補語は対格であることが多い。

〔例13〕〔宗〕 а из бѣчькѣ гвозды вынимаша, и видеше воду текущую, идоша прочь (65v)

〔委〕 а из бочокѣ гвоздн выняша и видиша воду текущу и идоша прочь (126v)

〈そして彼らは樽から栓を抜き、水が流れるのを見て、そこを立ち去った〉

[例14] 〔宗〕 не терпяше бо господь богъ нашъ зрѣти на нечестивыя и поганыя, видя ихъ проливающа кровь христьянскую акы воды, и ины расточены от них по чюжимъ землямъ (140v/141)

〔委〕 не трпяше бо господь богъ нашъ зрѣти на нечестивыя и поганыя, видя ихъ проливающи кровь крестианьскую акы воду, иныи расточены от них по чюжимъ землямъ (179)

〈わたしたちの主なる神は、神を信じない異教徒たちがキリスト教徒の血を水のように流し、他の者たちが彼らのために他の土地へ追いやられたのを目にして、見るに忍びなかった〉

[例15] 〔宗〕 и яко быша на рѣцѣ Кѣголѣ, и ту усрѣтоша стоящъ полкъ нѣмецкыи (144v)

〔委〕 и яко быша на рѣцѣ Кѣголѣ, и ту устрѣтоша стоящъ полкъ нѣмечкои (181)

〈彼ら（＝ノヴゴロドの人々）がケゴラ川にさしかかったとき、待ち構えていたネムツィ（＝ドイツ騎士団）の軍隊に出会った〉

[例 13] では文の述語 видеше/видиша (→видѣша アオリスト 3 人称複数「彼らは見た」) の補語 воду (「水を」) に現在分詞 текущо / текущу (「流れる」) が文法的に一致して (女性単数対格) 「水が流れるのを見た」という表現が作られている。また、[例 14] では二次的述語の機能を果たす現在分詞 видя の補語 ихъ (「彼らを」) と現在分詞 проливающа (「流れる」) が複数対格で一致して「彼らが流す」と表現している。<sup>5</sup> また、[例 15] では述語動詞 усрѣтоша/ustrѣтоша (アオリスト 3 人称複数「彼らは見つけた」) の補語 полкъ (「軍隊を」) と現在分詞 стоящъ (「布陣している」) とが男性単数対格で一致を示している。このような分詞の第二斜格の用法は英語の第 5 文型 (SVOC) に見られる「補語 (C=Complement)」と同じ統語機能であり、現代ロシア語には受け継がれていない。

上記の例のうち [例 14] の「委員会本」のテキストには不変化分詞 проливающи の使用が確認できるのだが、これ以外には同写本で不変化分詞が第二斜格として使われた例はない。これとは対照的に、この構文では「宗務院本」で -e で終わるタイプの不変化分詞が「委員会本」では動詞の補語と文法的に一致している例を見ることができる。それは以下の通りである。

<sup>5</sup> [例 15] にはもう一つの複数対格補語 ины/иныи (「他の者たちを」) があり、これに受動過去分詞 расточены 「追放された」が文法的に一致して第二斜格となっている。

[例16] [宗] Послѣдъ же оставъшеся Ижеряне усрѣтоша ихъ *бегающе*. и ту ихъ избиша много, а прокъ ихъ разбежеса, куды кто видя (103v)

[委] Нъ послѣ толко оставася Ижерянь усрѣтоша ихъ *бѣгающих*, и ту ихъ избиша много, а останокъ ихъ разбѣгошася (→ разбѣгошася), кои гдѣ (148)

(その後イジェラの人々は残って彼ら(ヤミの人々)が逃げるのを見つけ、その場で彼らの多くを殺したが、他の[[委] 残りの]者たちはそれぞれの方向に散り散りに逃げた)

述語動詞は[例15]と同じ *усрѣтоша* で補語は複数対格なのだが、「宗務院本」では男性複数主格に由来する不変化分詞 *бегающе* が使われているのに対して、「委員会本」では補語 *их* に正しく一致する *бѣгающих* が使われている。このように、実例はあまり多くはないものの、第二斜格構文は「委員会本」においても規範として確実に維持されていることがわかる。

#### 4 まとめ

分詞構文における分詞について『ノヴゴロド第一年代記』の新旧写本の相違における形態の相違のうちで最も顕著なものは、「宗務院本」で動作の担い手を表す名詞や代名詞と文法的な一致を示していた分詞が「委員会本」では *-ющи / -ящи / -вши / -ши* で終わる不変化形式に書き換えられていることである。<sup>6</sup> しかし、この変化を語尾変化に関する規範意識の衰退だと見ることはできない。なぜなら、限定語と被限定語との文法的関係を語尾の一致によって示すことは、東スラヴ語の世界において文献時代初期から現代に至るまで、守られ続けており、それが衰退する兆しが見えないからである。むしろ近世ロシア語期に不変化分詞が増加するのは、本論文で扱った二次的述語の構文を形成する機能に特化された語形が必要とされるようになったからなのかもしれない。つまり、近世ロシア語期になると限定語としての分詞と統語的手段としての分詞が書き手の意識の中で区別されるようになっていたということが出来る。これに対して、第二斜格構文と絶対与格構文を作る分詞は不変化詞化があまり進んでおらず、これら二つの用法は近代ロシア語成立期に消滅し、別の統語手段が生まれる。なお、二次的述語としての不変化分詞のみが18世紀になって副動詞として生まれ変わったように見えるのであるが、この両者の間の継承関係については種々の議論があり(例えば、[2, 398–399] お

<sup>6</sup> 『ノヴゴロド第一年代記』の新旧写本には出現例の少ない *-я(-а)* で終わる不変化分詞も近世ロシア語文献では頻繁に現れるようになるという [5, 338, 341 など]。

よび [3, 270] を見よ)、本論文の考察範囲を超えてしまうので、私見を述べることは差し控えたい。

### 年代記テキスト

- [1] Новгородская первая летопись старшего и младшего изводов. Москва–Ленинград. 1950. (Reprint: *Slavistic Printings and Reprintings*. 216. The Hague – Paris. 1969.)

### 参考文献

- [2] Issatschenko, Alexander, *Geschichte der russischen Sprache. 2. Band. Das 17. und 18. Jahrhundert*. Heidelberg. 1983.
- [3] Yokoyama, Olga T., “The history of gerund subject deletion in Russian”. C. V. Chvany and R. D. Brecht (ed.), *Morphosyntax in Slavic*. Columbus. 1980.
- [4] *Аванесов Р.И., Иванов В.В., Историческая грамматика русского языка. Морфология. Глагол*. Москва. 1982.
- [5] *Борковский В.И. (ред.), Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Простое предложение*. Москва. 1978.
- [6] 日本古代ロシア研究会訳「ノヴゴロド第一年代記古輯（シノド本）訳・註」。『古代ロシア研究』XII, 1978; XIII, 1980; XV, 1983; XVI, 1986; XVII, 1989; XVIII, 1991。
- [7] 岡本崇男「人名 Гюрги の表記をめぐって」。神戸外大論叢、第 59 巻 2 号、73–94。2008 年。

\* \* \*

本論文は 2019 年度「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」（基盤研究 (C)、平成 31 年度～33 年度、課題番号 19K00469、研究代表者・富山大学・名誉教授・中澤敦夫）、2021 年度研究会（2022 年 2 月 12 日、Zoom ミーティング）における研究報告「『ノヴゴロド第一年代記』における分詞と動作主体の文法的不一致について―書き手の規範意識の変化をめぐって―」の原稿をもとに不変化分詞に関する議論を発展させたものである。

Keywords: ロシア年代記 古代ロシア語 近世ロシア語 不変化分詞